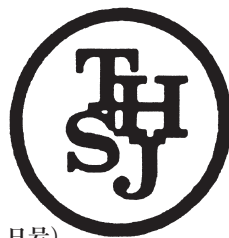


日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第87号 (2020年4月1日号)

発行者 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院人文学研究科内  
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com  
編集者 宮崎隆義 miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp



(宮崎隆義撮影：ドーチェスターの‘THE.WHITE.HART’ . 1985年夏頃。)

## *The Return of the Native*の曖昧さをめぐって

鮎澤 乗光

『帰郷』という作品には、結末についての曖昧さや、ユーステイシアの死をめぐる曖昧さなど様々な曖昧さがあるが、ここでは表題になっているreturnとnativeという語の曖昧さについて勝手な想像を交えつつ考えてみたい。この作品中では、それらの語の意味は人物によって異なるので、主要な登場人物のエグドン・ヒースにおけるそれぞれの階級的位置付けをできるだけ明確にしながらその作業を進めて行く。

作品中の第一世代のヴァイ大佐は退役高級士官であり、エグドンの地において明らかに紳士階級に属する「よそ者」である。他方、ヨープライト夫人は(おそらく別の土地の)貧しい副牧師の娘であり、死んだ夫はファーマー (small farmer) である。当時の農村社会における副牧師の地位はファーマーより上に見られ、尊敬されているが、財産の面でははるかに劣り、いわば紳士階

級でも下の方の境界に位置する。ヨーブライト夫人は副牧師の家から資産家の農場主のもとへ、夫の地位を引き上げ、自身の経済的上昇を計るために階級下降的に嫁いだ「よそ者」であり、今はファーマーとしての生活基盤を失い、遺産とブルームズ・エンドという屋敷に姪のトマシと住んで、息子の出世によってもとの地位にreturnすることを待ち望む曖昧な境遇にある。彼女は周囲の者（たとえば、ヴァイ大佐やワイルデーヴ）の階級的優位性はおろか、同等性すら認めない。当時のイギリス社会における階級間の流動性を反映した彼女のこうした階級意識が、クリムの帰還とその後の人生の選択を曖昧にし、トマシンのワイルデーヴとヴェンとの結婚の動機を曖昧にする一つの原因となる。

ユーステイシアはその出自からして、紛う方なき「よそ者」であり、根無し草である。彼女の生まれ育ったところはファッショナブルな海浜のリゾート地、バドマスで、父親は軍楽隊の隊長、母親はヴァイ大佐を父に持つ女性で、身分を落として音楽家と結婚する。こうした階級横断的な結婚をした両親を持つユーステイシアは、紳士階級の出身であるという階級的優越性を頼りに、自己の生まれ、育った地であるバドマスからの帰還者であるワイルデーヴと、パリからの帰還者であるクリムとの結婚を通して、エグドンからの脱出とバドマスへのreturnを計画する。ユーステイシアはエグドンから見れば「よそ者」であるが、バドマスから見れば不成功に終わった「帰還者」ともいえる曖昧さを持つ。

クリムはエグドンを去る前から、聖書の知識と水彩画の才能という学問、芸術の分野で周囲から将来を嘱望されていた。資力のない夫人は息子に、only feasible openingとしての商売の道を選ばせ、大きなestablishmentのmanagerというジェントルマンの専門職に就く可能性を与える。トマシンの結婚を諦めて、パリへの道を選んだクリムの挫折は必然的である。彼はダイヤモンド商人（の見習い）としての自分の人生に意義を見いだせず、教師の資格を取得しての学校の経営というプロジェクトを抱いて、エグドンに帰還する。帰還の動機は明瞭だが、この人生計画は一見して唐突である。彼はaffluenceではなくwisdomをもたらず知識、学問に価値を見出すが、それは恐らく、幼少時からの母親の教育の影響であり、それと、バドマスか、パリで培われたであろう「個人を犠牲にして階級を高めたい」という人生観に基づく選択である。そこにはハーディ自身のロンドンでの建築家としての体験と、「帰郷」体験と重なる要素が暗示され、クリム——ハーディ自身、ユーステイシア——妻、エマ、ヨーブライト夫人——母、ジェマイマ、という伝記的な相関関係が想像される。

ワイルデーヴは親戚に裕福な商人や、カナダで成功した叔父がいる、ファーマーの家に生まれ、時代の先端を行く専門職であるcivil engineerとしての年季契約を終えるが、engineering gentlemanとして出世するチャンスを捨てて、今は近所にWildev's Patchと呼ばれる土地を所有するpublic houseの経営者である。しかし、彼の零落の理由はさだかではなく、故郷に帰還した動機も曖昧である。労働を嫌い、紳士の遊蕩の生活を望んでいる点では、ユーステイシアと同類であり、彼の人生観は、先のクリムのそれを引き合いに出せば、「階級を犠牲にして個人を高める」という人生観に近く、学問や知識の獲得においても、wisdomより affluence を重視する。帰郷後のユーステイシアとの情事やトマシンの結婚の根底にはこうした価値観と人生観がある。ワイルデーヴは紳士階級を目指す者の別の面を表し、クリムとは裏腹の関係にいる。

Nativeという共通性を持つように見えるのがトマシとヴェンである。ヴェンはファーマー階級に属しながら、ヨーブライト夫人とクリムの階級差別的干渉で、トマシンの結婚を諦める。エグドンでの生来の生き方に興味を失い、八十頭の牛を有する酪農場（dairy farm）を手放して、ベンガラ売りに身を落とし、トマシとワイルデーヴの結婚のゆくすえを見守り続ける。彼のそうした行為の動機はトマシンへの寛大な愛と、ワイルデーヴのhonesty への懐疑ということだが、後者の動機の方が強く、彼らの結婚の結末を予期していたのであろう。その結果、彼は

トマシンという自分より上の地位の、しかも財産家と結婚する。その意味では、貯めた資金で、もとの、しかももっと裕福な酪農場主に復帰するヴェンは、「生まれ、育った生活の場に帰る人」である。

トマシンはエグドンに生まれ、育ち、ユーステイシアのようにエグドンを怪物として恐れることもない、nativeと考えてよい。彼女は叔母の影響を受けた仮構の階級的偏見、優越意識からヴェンの求婚を一度断る。彼女はもともとクリムとの結婚を望むが、息子の将来に夢をかけるヨーブライト夫人の反対にあい、またパリでの成功を目指すクリム自身の意志によって、彼との結婚をあきらめ、次善の相手、ヴェンより裕福で、教育もある紳士のワイルデーヴと結婚する。これら三人の男性との結婚をめぐる曖昧な態度から、一度は拒否したヴェンのもとへ戻るトマシンの行為はreturnであり、結婚におけるthe return of the nativeを実践している。彼女はスティックルフォードのヴェンの酪農場という、一度失ったファーマーの生活の場をヴェンとの結婚によって得て、ヨーブライト夫人の百ポンドの遺産とワイルデーヴの遺産約一万ポンドを受け継ぐ。そして、それらの財産と家はワイルデーヴとの間の子供、ユーステイシア・クレメンタイン（・ワイルデーヴ、後にヴェン）の相続財産でもある。クリムにとって、この子供の名前は彼とユーステイシアの不幸な結婚の永久の思い出として受け取られるが、トマシンにとっては、クリムへの彼女の思いとそのクリムが愛したユーステイシアへの思いが込められ、我が子を通しての、（自分を含めて）5人の人物のエグドンにおける結合の思いが込められているのだろう。

## 「ハーディと私、その後」

風 間 末 起 子

ハーディの小説を英語で初めて読んだのは院生の頃、23歳のときだった。作品は*Far from the Madding Crowd* (1874) で、苦勞したせいか、思い入れがかなり深い。

そのころ、高畠文夫先生のご翻訳著『遙か群衆を離れて』（角川書店、1969）について、恩師の瀧山季乃先生から伺っていたが、残念なことに母校の図書館には入っていなかった。当時の私は、「翻訳著をお借りできますか」（借りてコピーをとりたい）を口に出して言う勇気がなかった。だから肝心の翻訳がない状態で授業に臨み、訳読でかなり苦勞した。こんなに英語が読めなくて文学研究などできるわけがないと絶望的な気分は何度も陥った。

その後、瀧山先生が橘智子先生と共に、翻訳著『狂おしき群衆をはなれて』（千城、1987）を出されたので、ようやく、この小説を、日本語で通読することができ、とても嬉しかった。33歳のときだった。

ハーディの6大小説はどれもみな好きだが、*Madding Crowd*は苦澁の思い出があるせいか、とりわけ好きである。特に印象が鮮明なのは40章である。身重のファニー・ロビンが体を引きずるようにしてヤルベリーの丘を越えてキャスタブリッジの救貧院までたどり着こうとする有名な場面である。授業中に、先生ご自身も「この章は作品中でもっともすばらしい章です」とおっしゃっていたし、「この40章だけを取り上げて論文を書くこともできます」という趣旨のことも教えていただいた。20代の私にさえ、そこにハーディ文学のエッセンスが詰まっていることが容易に察知できたし、理解もできた。

40章では、犬が途中から登場し、ファニーの旅を支えていく。その下りを読んだ時、こんな状

況においてすら、ファニーは希望のかけらを見つけているとわかった。

悲しく厳かで、それでいて情け深くもある夜の一面が、人目をはばかる残酷な夜の面から分離して、犬の姿に具現化されたのである。暗闇というものは、とるに足らない平凡な人々に、詩的才能を与えるものだが、この苦悩する女も自分の思いを、形あるものに創り上げたのである。(40章)

幼い頃、マッチ売りの少女を読んだとき、貧しくて辛いことばかりの少女にとって、死という結末が一縷の希望に変貌するものなのか、と冷酷と温かさの混在した大人の世界を教えてもらったような気がした。ファニー・ロビンのこの箇所を読んだときも、希望と呼ぶにはあまりに儂く、微弱な光であるが、それでも希望を見つけようとする人間の想像力に圧倒される思いがした。

人は死によって勝利するはずがないのだが、ハーディは死者に対してやさしい。いや、死者に命を吹き込もうとする。生きているあいだに報われてこそと思うのは、私たちの愚かさかもしれない。ハーディの筆の力は、ファニーを蘇らせて、意気揚々と、今度はバスシーバを苦しめている。

自然で慎み深く、しかも実地的な方法で、ファニーを荷馬車で運ぼうと万端整った時、あの情念の炎が、不死鳥のごとく、蘇りのために、ファニーの遺灰の中で燃え盛っていたにちがいない。たった一つの偉業、死という偉業によって、卑しい境遇も偉大なものに変化するのだが、ファニーはその死に到達したのである。(43章)

ファニーは惨めな死を救貧院でむかえた女に過ぎないが、小説家の手にかかるると、こんなふうになる。40年以上前に、この小説に感動した記憶は、今につながっていると実感できる。死者にやさしいのは生きている人間に希望を与えるためかな？ ハーディ小説の温かさに今も惹かれている。

## ハーディ小説と移住問題

橋本史帆

ヴィクトリア朝時代、大英帝国の広がりとともに、イギリスを出国する移民の数が増大した。ナポレオン戦争が終結した1815年から第一次世界大戦が始まる1914年までの間に、イギリスを出国した人の数は2000万人を超えるともいわれている。この時期はまさに移民の世紀であった。様々な社会的背景を背負った人々が異なる理由から外地へ旅立ったが、彼らの出国理由は概してイギリスや移住先の諸事情に左右されるものであった。いくつか例を挙げてみよう。19世紀のイギリスでは、人口増加に伴う貧民層の激増と貧困問題が深刻であった。そこで、これらの問題を解決すべく打たれた手が、貧しい人々を植民地に移住させることであった。また、植民地への移住を促されたのが、ミドルクラスの価値規範を破る言動をとった人々であった。E・J・ホブズ



ボームが当時の植民地を「ゴミ箱」と評したように、そこはイギリス社会にとって不都合な人々が送り出される場所であった。一方、植民地にとってイギリスからやってくる移民は貴重な労働力であった。彼らは植民地の文化、経済、社会を發展させ、国家の形成に一役買ったのである。

女性に目を向けると、1880年代から20世紀初頭までは女性移住の最盛期であった。労働者階級の女性は家事使用人として、あるいはイギリスで「余った女」と呼ばれた未婚のミドルクラスの女性はガヴァネスの就職口を求めて植民地へと旅立った。実はこの女性移住には、植民地での労働力不足を補う以上の意味が込められていた。当地では男性の入植者が女性より圧倒的に多く、慢性的な女性不足に陥っていたのである。このような事情から、移住する女性は結婚して家族を作り、帝国の妻、そして母になることを期待された。とりわけミドルクラスの女性には、イギリス式の家を築き、元来備わっていると信じられていた教養と道徳力によって、イギリス風の文化や価値観を当地に伝えるという役目が付与された。女性移住は大英帝国の安定を図るために必要な営みの一つであったのである。

ハーディは当時の移住問題を、真正面から取り扱わなかった。しかしハーディの小説では、外国への旅立ちや外地からの帰国に関わる事情が登場人物に不幸を与えるように描かれている場合が多い。短編小説「丘の家の侵入者」(1884)は、オーストラリアへの移住に失敗し、一文無しになってイギリスに戻ってきたフィリップ・ホール一家の悲惨さを描いている。『ダーバヴィル家のテス』(1891)では、ブラジルに移住したエンジェル・クレアが、当地で貧困、飢餓、病気のため命を落とすイングランド人を目にしている。『日陰者ジュード』(1895)をみていこう。この作品では、ジュード・フォーレイとの結婚生活がうまくいかなかったアラベラ・ドンが、イギリスからオーストラリアへ移住する。貧しく、自由奔放な行動が目立つアラベラの移住は、貧困問題を解決し、伝統的価値基準を無視する人々を移民として送り出したヴィクトリア朝時代の移住の一例として読むことができる。

では、アラベラの移住はどのようなものだったのだろうか。アラベラはオーストラリアでジュードの子供とされるリトル・ファーザー・タイムを出産する。しかし、彼女はその子の養育を両親に任せてしまう。のちにカートレットと出会い、彼と結婚するが、喧嘩になった後、家を飛び出したアラベラは単身イギリスに戻る。当時の移住政策に込められた狙いを考慮すれば、アラベラの帰国は移住政策の行き詰まりを具象化するものといえるだろう。加えて、アラベラはオーストラリアで家庭らしい家庭を作ることができなかった。彼女が経験する家族の断絶は、移住した女性に帝国の妻、そして母になることを望んだ当時の移住政策の失敗を意味するものなのである。つまり、ハーディはアラベラの家系の破綻を通じて、当時の移住への取り組みに疑問を呈しているということになるだろう。それはまた、移住と連動していた帝国の拡大に対する作家の反発と解釈することができる。

ハーディの小説に登場する異国の地に旅立つ人物や、外地から戻ってきた人物を分析していくと、移民の世紀を生きた作家の移住に対する見解をうかがい知ることができる。政策に翻弄され、過酷な人生を余儀なくされた当時の移民の苦勞が、ハーディの小説に読み取ることができる。そこには、人間らしく生きていける社会の大切さが語りかけられている。アメリカやヨーロッパで移民に対する風当たりが強まっている昨今、ハーディの小説は、移民や難民の問題に目を向け、その課題を把握して考える力を与えてくれるのではないだろうか。

## 第62回大会印象記

清宮協子

日本ハーディ協会第62回大会は、2019年11月2日（土）、糸田郁子氏のお世話により、桜美林大学町田キャンパス明々館4階408号室において開催された。まず、庶務委員長の今村紅子氏により開会の辞が述べられ、その後、午前の部で2名の研究発表が行われた。

最初に、永富友海氏の司会のもと、長田舞氏と杉村醇子氏の発表が行われた。長田舞氏は、「Two on a Tower における植民地からの知らせ」と題して、本作品は、恋愛小説として論じられることが多かったが、作品中の手紙や新聞を分析してみると、1880年代の英国における男性中心社会を表す小説として読むことができると結論づけられた。男性と女性の領域が明確に分かれていたヴィクトリア朝社会において、ヴィヴィエットとスウィジンの結婚は、まずは階級、次は女性が年長となる年齢差という観点からみると、一般的な道德基準から逸脱したものであった。そのため、植民地にいる彼女の夫ブラント卿の死亡記事や添えられた手紙などによって彼らの愛は妨害され、彼の死後も、身内の男性たちの介入によって二人の結婚は成就されることがない。ハーディの他の作品でも、植民地は、男性が活躍する場として使われており、男性性が最も強調される英国の帝国主義の象徴と捉えることができる。このように、彼女の社会規範に対する挑戦は妨害され、最終的に彼女は、兄に強いられたヘルムズデール主教との結婚によって男性中心社会に服従することになったと論じられた。

杉村醇子氏は、「The Return of the Native (1878) における Mrs Yeobrightの表象」と題して、今まで、帰郷者の問題やユーステイシアの欲望の観点から読み解かれることが多かった本作品を「母性」という観点から読むことにより、これまで軽視されがちだった第6章に重要性が見出せると結論づけた。ヨーブライイト夫人とトマシンを比較すると「母性」には二面性があることが分かるという。まず、ヨーブライイト夫人の、子供をコントロールしようとする「母性」がある。それは批判されがちであるが、子供を抱えたまま寡婦になった彼女が、最終的に悲劇に陥った背景には、経済的困窮があると指摘された。一方で、トマシンのもつ妊孕力は「母性」の持つ明るい面であるとする。彼女は、結婚後すぐに妊娠し母となり、愛情と責任を持つ女性へと成長し、寡婦となった後も再婚によってさらに子沢山になる予感すら漂わせている。彼女が、後に再婚相手となるヴェンにだけ子供を抱かせているのは注目に値し、ヴェンは父性を持つキャラクターとして描かれていると指摘された。今までこの作品は、異教的世界に対するキリスト教的世界の勝利として読まれることが多かったが、母性の重層性を描き出した物語として解釈することができ、後の長編小説でハーディが女性のあり方の多様性を模索していることの先駆けとして捉えることができると論じられた。

昼食をはさみ、午後の部は事務局長の上原早苗氏の司会により総会が行われ、決算報告、編集委員会報告、次期大会についての予告などがなされた。運営会議での話し合いにより、懸案となっていた日本学術振興会には加入しないこと、「19世紀イギリス文学合同研究会」には参加の方向で話が進んでいること等が報告された。

その後、3人の講師による「ハーディの短編小説の世界～その魅力と語りの技法～」と題されたシンポジウムが行われた。まず、司会兼講師の宮崎隆義氏が、ハーディの長編小説は、授業や

ゼミで扱うには授業時間などの点からハードルが高く、短編小説の魅力を確認することが、近年の学生の文学離れの歯止めになるのではないかと、シンポジウムの目的を述べられた。そして「ハーディの短編小説の語り」と題して、短編集の全容を紹介されたのち、ハーディの「語り」について、4つの多角的視点から考察された。まず「Ⅰ. ハーディの『語り』— ‘tale’ ということ」で、短編集のタイトルに“tales”とあることにハーディの語りに対する繊細な感覚が感じられるとし、語り手の存在に注意することでプロットや文体の考察に奥行きが生まれると指摘された。例えば、短編集 *Wessex Tales* の巻頭を飾る ‘The Three Strangers’ は、ユーモアある語り口に特徴があるとし、また「Ⅱ. 語りの信頼性：手紙、代筆、日記」では、代筆によるラブレターが巻き起こす深刻なトラブルが話を面白くしていたり、ハーディの ‘Barbara of the House of Grebe’ からヒントを得て創作されたという谷崎潤一郎の『春琴抄』とを比較すると、ハーディの語りの工夫が浮かび上がったりすると述べられた。さらに「Ⅲ. 語りとユーモア性、おかしさ」では ‘A Few Crusted Characters’ に出てくる主人公トニーが、元恋人と婚約者と馬車に乗り合わせるという状況を作り出し笑いを誘っていると指摘された。最後に「Ⅳ. 語りと聴覚性、視点、距離感」では、日記という形をとった ‘Alicia’s Diary’ は、内容を客観的に見るよう読者に促していると指摘された。

次に、永松京子氏が「ハーディ短編小説における手紙」と題して、長編に比べて短編における手紙の研究が少ないことを指摘し、3つの短編を取り上げ手紙がどのような効果をもたらしているかを考察された。まず「書き手が伝えたい以上のことを手紙が伝えてしまう」例として、‘For Conscience’ Sake’ を挙げ、ミルボーンが何十年も前に婚約破棄をしたレオノーラに結婚を申し込んだのは、彼女のことを想ってではなく、約束を守る男としての自尊心を守りたいという身勝手な意図があり、手紙というツールがそれを浮かび上がらせる効果を持っていると指摘された。次に「手紙の書き手の伝えたいことが伝わらない」例として ‘Interloper at the Knap’ を挙げ、経済的に余裕があり自立心の強いサリーは、ダートンと結婚する気は無いのだが、妙齢の女性は誰でも結婚を望んでいると思込んでいるダートンは、手紙に書かれている拒絶を本心ではないと自分勝手に解釈してしまう。最後に「手紙の内容よりも、字や文章の上手い下手が重要視される」例として、‘The Winters and the Palmleys’ を取り上げて、田舎育ちの純朴なジャックが都会育ちで洗練されたハリエットに求婚し、ジャックが村を離れて文通が始まると、彼の下手な文字、不正確な綴りや稚拙な文章が彼女を幻滅させるという事態が起こる。このように、ハーディ作品においては手紙が書き手の意図どおりに相手に伝わることは稀で、登場人物達を翻弄する要因となることが多いことを指摘された。

最後に、服部美樹氏が「ハーディ小説における『腕』と ‘The Withered Arm’ 」と題して、ハーディ作品においては、セクシュアリティを表す時に唇の描写がされているという指摘がよくなされているが、重要な場面においては腕への言及も繰り返されていると指摘し、作中における腕の描写を考察された。女性の腕を描写する時に、丸みを帯びた形や白やピンクといった色など女性らしさを表す形容詞をつけるのは、ハーディ以外の作家の作品にも見られ、文学的な慣習としてある程度確立された表現法であるといえるが、例えば『テス』では、エンジェルから口づけをされた腕が赤くなるなど、紋切り型を超えたハーディ独自の表現が見られると指摘された。さらに、*The Return of the Native* と ‘The Withered Arm’ を比較してみると、一人の女性の怨念がもう一人の女性を傷つけるという構図が共通しているが、生み出される効果は異なっている。*The Return* で腕を見ているのは男性で、エロティックな要素が強調されている一方で、‘The Withered Arm’ のガートルードのシミのある腕を見ているのは同性であるローダであるところに特徴がある。ピンクの丸みをおびた腕は、若い彼女の肉体的な美しさの象徴であり、そこに不健康な色のシミがつくというのは、その美が傷つけられていると解釈ができる。そのシミを、女

性の価値として容色を最重要視する男性の代表である夫の目に触れないよう、ガートルードに示唆するローダは、ガートルードのセクシュアリティを抑圧していると論じられた。

シンポジウムの後、渡千鶴子氏の司会のもと、「英語の音を読む一方法と実践」と題して、豊田昌倫氏による特別公演が行われた。英語を読む時に、多くの人は意味をとろうとするが、音に注目すると異なる側面が見えてくると、具体的な例を上げつつ解説をされた。まず導入として、ロンドンの地下鉄に貼られている英語の警告文“Obstructing the doors can be dangerous”にはdやcの音が繰り返され、長母音と短母音、強弱のリズムなどにも同じパターンの繰り返しが目につく。また、タバコの箱に印刷された“Smoking Kills”では、英語で最も強くアグレッシブな音とされているkという子音が使われており、最初と最後のsにも類似音が使われている。これらの工夫は、読者にインパクトを与え、記憶に残りやすい効果をもたらしている。同じように、文学作品も音に注目して読むと、例えばAgatha Christieは書き出しに工夫を凝らす作家として知られ、dの頭韻の繰り返しが、タイトル、たとえば*Appoint with Death*にあるDeathの印象を強めていたり、音節を徐々に長くスピードアップしたりするなど、物語に読者を引き込む工夫がある。その他Christina Rossetti、Emily Bronte、Robert Browning、Thomas Gray、Henry Fielding、Samuel Taylor Coleridge、Virginia Woolfらの作品を例に挙げて、音の工夫が作品に与える効果を検証された。ハーディの*Tess of the d'Urbervilles* の第20章、エンジェルに向かって自分をテスと呼んで欲しいとお願いする場面の、髪の毛にたまった滴が小粒の真珠のように見えるという描写で、*Minute diamonds of moisture from the mist...* とm音を連続させることで、水滴にソフトな印象を与えていると指摘された。講演後、ハーディを文体論から見て一言で言うとうどうなるかという質問に対し、豊田氏はくとならえがたい文体であり、ラテン語起源の語を使ったりアングロサクソン起源の語を使ったり一貫性がなく、特徴をあえて隠しているような感じがする>と答えられた。

全てのプログラムが終了し、新妻昭彦会長が閉会の辞を述べられた。その後、桜美林大学崇貞館1階「桜カフェ」に会場を移し、懇親会が催された。大会の運営にご尽力下さった桜美林大学および協会事務局の皆様にご心より御礼申し上げたい。



# 事務局よりのお知らせ

## 会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけますと幸いです。なお、顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。

なお、会費を3年間滞納なさいますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

## 登録内容の変更について

近年、転居先不明で協会ニュースや会報が事務局に戻ってくるケースが増えています。勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更が生じましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただけますよう、お願いいたします。

## 次回大会について（研究発表募集）

次回第63回大会は、今年の10月31日（土）に、福岡女学院大学（福岡市南区日佐3丁目42-1）にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、日本ハーディ協会顧問深澤俊先生をお願いいたしました。興味深いご講演を拝聴できるものと楽しみにしております。

シンポジウムは、上智大学教授永富友海先生を中心にご準備いただいております。パネリスト等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

### 《内外ニュース》

会員による著訳書：

坂田薫子著『怪物のトリセツ』（音羽書房鶴見書店、2019年5月）

橋本史帆著『トマス・ハーディの小説世界』（音羽書房鶴見書店、2019年5月）

岩田託子訳、ロバート・リーチ著『「パンチ&ジュディ」のイギリス文化史』（昭和堂、2019年5月）

清水伊津代他訳『ジョージ・エリオット全集4 サイラス・マーナー』（彩流社、2019年8月）

清水伊津代、風間末起子、松井豊次訳（内田能嗣、藤田繁監修）『トマス・ハーディ全集4 はるか群衆をはなれて』（大阪教育図書、2020年1月）

### 《編集後記》

令和の時代となって初めての正月を迎え、希望に溢れた時代の幕開けと思っておりましたら新型コロナウイルスの広がりという大きな不安に襲われました。このニュースが皆様のもとに届く頃には収束してもらいたいとは思いますが、当たり前の平和でのどかな日々と思っておりましたら、危険がいつの間にか足元にあるいは背後に迫っていたのかとふと慄きを覚えます。災害や病氣、事故など、「盲目の意思」に翻弄されているのが私たち人間なのかもしれません。普段の生活の中に、ハーディの思いを感じているは皆様も同じかもしれませんが、作品を読むことによって、観念の世界でハーディと語らえるのは本当に幸せなことでもあります。

入試の業務や学期末の業務等、お忙しい時期にもかかわらず、今号に玉稿をお寄せいただきました先生方には心より感謝を申し上げます。最後になりましたが、編集を担当するにあたりサポートしていただきました皆様、中央大学生協印刷部の藤様にあらためて心より御礼申し上げます。

なお、次号は本年9月発行予定で、原稿の締め切りは本年7月10日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆様、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。